

# 絵本の読み聞かせからの学び

## — 領域「表現」と領域「言葉」からの考察 —

中村 三緒子\*

Learning from story-telling of picture books:  
Consideration from Expression and Language

Mioko Nakamura

### 1. 学びに向かう力

ベネッセ教育総合研究所『幼児期の家庭教育国際調査【2018年】』<sup>(1)</sup> 結果について無藤によると、日本の場合「学びに向かう力」は、5つの因子が同時に伸びていくのではなく、「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」としての順番で伸びていく傾向が見られ、母親の「寄り添い型養育態度」が「学びに向かう力」の成長と関連するという。母親が学びの環境を整備するような行動が、子どもの数の知識の獲得とつながる。母親が子どもの思考を促すような姿勢が、子どもの「学びに向かう力」の成長と関連が高く、「分類」や「言葉」の力も促す<sup>(2)</sup>。また、荒牧(2019)によると、幼児期の読み聞かせ体験が豊かだった子どもほど、小学生になってからひとりで絵本や本を読む(見る)頻度が高い傾向にある。読み聞かせは子どもにとって、言葉を耳で聞き、文字を目で追い、ときには子ども自身がお気に入りのセリフや擬音を口にするなど、言語を総合的に活用する場である。子どもは読み聞かせをしてもらいながら登場人物の心情を想像したり、絵本に描かれていない場面までも想像したりしている。読み聞かせの時間、物語の中に没入し、日常とは異なる世界を楽しみながら、子どもは視野を広げ、思考を豊かにしている。読み聞かせは単に「文字を読めるようになる」ことを目標にしたものではなく、保護者との読書体験の共有を通じて、言葉を使って豊かなコミュニケーションをとったり、自分の考えを深めたりする場でもある。文字を読

ることと、書かれている内容を理解することは違う。早い時期からひとりで読んでいても、それだけで言葉の力が高まるわけではない。重要なのは、ひとり読みをするかどうかよりも、本の内容を味わったり、書かれていることを実際のできごとに結びつけて考える。そうした子どもの読書体験を支える上で、幼児期から小学校低学年での読み聞かせが役に立つ。ひとり読みに慣れた子どもについても、保護者が読み聞かせを行うことで子どもの読書体験の伴走者となり、豊かな読書習慣の確立につながっていくという<sup>(3)</sup>。

無藤は「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」(2012年)や「第4回子育て生活基本調査(小中版)」(2011年)結果をもとに、「学びに向かう力」は、言葉の発達に依存すると説明する。家庭で、子どもの言葉の発達を促すには、保護者が子どもの話をよく聞くことが大切。子どもが学校でどんな過ごし方をしているのかなど、聞いてほしい。そうすることで、子どもは、自分の経験したことや意見をまとめる機会を増やすこともできる。もう一つは、絵本や本の読み聞かせである。読み聞かせというと、文字があまり読めない幼児期にするものと思っている保護者も多いが、文字が読めることと本が読めることは別のこと。本が読めるということは、そこに出てくる言葉の意味がわかっている必要はないが、一人で読んでいる1年生の多くは、意味もわからず文字だけを追って読んでいる。読み聞かせをすると、子どもにとっては知的な負担がずっと軽くなり、意味理解に集中できる。そのため、低学年でも

\* 淑徳大学短期大学部こども学科准教授

読み聞かせを継続したほうがよいという<sup>(4)</sup>。

秋田（2009）によると、PISA 調査による読解力の低下が大人側の危機意識が旧幼稚園教育要領の領域「言葉」の改訂に大きくはたらいたという。教育行政関係者は、これらの問題に対応するため、グローバル化・情報化する社会において、多様な人と協働し合っていく力を育成しようと、言語力育成協力者会議を発足させて、幼小中高の一貫した教育課程によって、言語力の育成や言語力活用の重視を図っていかうとする考えを打ち出した。領域「言葉」においては、他4領域のように要領自体の内容を改善・充実したりするだけではなく、幼小中高を通した言語力の一貫育成の意味合いが込められている。そのため、幼児教育にふさわしい教育内容（聞く力の育成や言葉を交わす喜びを味わう経験）を通して、小学校以上の対話力の基礎となる言語力（コミュニケーション能力や思考力）を育成させていくことが求められている<sup>(5)</sup>。2017（平成29）年、告示された幼稚園教育要領では、領域「言葉」のねらいにおいて、第3の文言に、「言葉に対する感覚を豊かにする」といった文言が付け加えられ、「3. 日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」は「3. 日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」に改められることになった（下線筆者）。

無藤（2017）は、新「幼稚園要領」、領域「言葉」のねらいに「言葉に対する感覚」の文言が付け加えられたことを受け、保育者がなすべき役割として、保育者は、幼児に日常生活に必要な言葉を理解させていかなければならないが、言葉そのものへの関心（言葉の響き、リズム、新たな言葉に触れる等）を促して、言葉の楽しさ、面白さ、微妙さを感じる物語絵本を与えたり、言葉遊びの場を充実化させたりしていくことが大切であるという。

## 2. 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂

2017（平成29）年度に告示された「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こ

ども園教育・保育要領」では、3つの施設の共通性が明確になり、幼児期の教育の独自性が確立し、その上で小学校へとつなぐことが示された<sup>(6)</sup>。3法令が同時に改定された趣旨は①3歳以上の子どもについての「幼児教育の共通化」、②子ども・子育て支援新制度での「幼児教育の『質』の方向性」、③小学校から見たときの「幼児教育で育つ力の明確化」<sup>(7)</sup>の3つがあげられた。どのような方向に向けて幼児教育を行い、どのような方法で教育としての質を上げるのか、具体的には「育みたい資質・能力」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で示された<sup>(8)</sup>。また、長期的な展望をもって幼児教育が規定された。

### 2.1 幼児期に育てたい力

「幼稚園教育要領」第1章では、幼児教育の根幹を幼児期の特性に応じて育まれる「見方・考え方」として示されている。幼児教育における「見方・考え方」は「幼児がそれぞれ発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね、遊びが発展し生活が広がる中で環境との関わり方や意味に気づき、それらを取り込もうとして諸感覚を働かせながら試行錯誤したり、思いを巡らせたりすることである<sup>(9)</sup>。幼児教育の一番の中心は、「見方・考え方」であり、子どもがそれを自分のものにしていく過程であり、それを保育者は援助していく。「見方・考え方」が成立していく過程が「学び」であり、幼児期にふさわしい教育のあり方であり、一番の中核になる<sup>(10)</sup>。

根幹となる力は3つに分けられ、①「知識及び技能の基礎」②「思考力・判断力・表現力等の基礎」③「学びに向かう力、人間性等」である。これらは従来、小・中学校で言われてきた学力の3要素に対応した「知識・技能」「思考力」「主体的に学習する態度」であるという<sup>(11)</sup>。

①「知識及び技能の基礎」の部分は「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする」であり、②「思考力・判断力・表現力等の基礎」の部分は「気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする」、③「学びに向かう力、人間性等」は「心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする」で

ある。

## 2.2 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

3つの資質・能力を柱として、より具体的な目標として定められたのが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」であり、これらはすべて5領域のなかにでてくる内容である。5領域には「ねらい」があって、それは「心情・意欲・態度」を中心とした3つの資質・能力部分であり、具体的な内容が示され、そのうえで10の姿が提示されている。5歳児終了までに資質・能力が育っていく際の具体的な姿としてあげられ、5領域の中で5歳児の後半で、子どもたちが育っていくであろう姿として示されている<sup>(12)</sup>。

「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂では、「第2章ねらい及び内容」は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と連動して加筆されているものが多い<sup>(13)</sup>。(1)「健康な心と体」は領域「健康」、(2)「自立心」、(3)「協同性」、(4)「道徳性・規範意識の芽生え」、(5)「社会生活との関わり」は領域「人間関係」、(6)「思考力の芽生え」、(7)「自然との関わり・生命尊重」、(8)「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」は領域「環境」、(9)「言葉による伝え合い」は領域「言葉」、(10)「豊かな感性と表現」は領域「表現」の部分である。

## 2.3 主体的・対話的で深い学び

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を子どもたちに育てていく指導ポイントには、「主体的・対話的で深い学び」があげられる。

### 1) 主体的な学びの視点

主体的な学びの視点は「周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働きかけ、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につなげる「主体的な学び」が実現できているか」である。見通しをもてるようにすることは、この先について子どもにイメージさせることであり、「やってみよう」と意欲をもち、先の見通しや展開を考えたり、振り返りをしたりしながら、遊びと生活をより発展させていくことである。さらに、小学校以降の教育につながる「アクティブ・

ラーニング」の核にもなる。

### 2) 対話的な学びの視点

対話的な学びの視点は、「他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか」である。この部分では「伝え合い」が重要であり、言葉や行動で伝え合い、つなげて思考を深めたりすることを示している。

### 3) 深い学びの視点

深い学びの視点は「直接的・具体的な体験の中で『見方・考え方』を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで思考錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとしてとらえる『深い学び』が実現できているか」である。

①質・能力の3つの柱、②幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿、③主体的・対話的で深い学びを実際に実現するには、「全体的な計画」に基づいて実現可能な「指導計画」を考え、質の高い幼児教育を行うことが求められる<sup>(14)</sup>。

## 3. 発達と領域「言葉」

### 3.1 0歳から3歳未満児の育ちと言葉

改訂された「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では乳児および1歳から3歳未満児の保育に関する記載が充実した。

保育内容に関する「ねらい及び内容」の記載では、3歳未満児の保育の意義がより明確化され、保育のなかで、充実をはかることが明示されている。「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」の3視点にまとめられた。1歳以上3歳未満児の「ねらい及び内容」は心身の発達に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」、感性と表現に関する領域「表現」にまとめられた<sup>(15)</sup>。

言葉の獲得に関する領域「言葉」では経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。(ア)ねらい ①言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じ

る。② 人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。③ 絵本や物語等に親しみとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

(ウ) 内容の取扱い ① 身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていくものであることを考慮して、楽しい雰囲気の中で保育士等との言葉のやり取りができるようにすること。② 子どもが自分の思いを言葉で伝えるとともに、他の子どもの話などを聞くことを通して、次第に話を理解し、言葉による伝え合いができるようになるよう、気持ちや経験等の言語化を行うことを援助するなど、子ども同士の関わりの仲立ちを行うようにすること。③ この時期は、片言から、二語文、ごっこ遊びでのやり取りができる程度へと、大きく言葉の習得が進む時期であることから、それぞれの子どもの発達状況に応じて、遊びや関わりの工夫など、保育の内容を適切に展開することが必要と記される。

### 3.2 3歳児・4歳児・5歳児の育ちと言葉

領域「言葉」は言葉の獲得に関する指導の観点が示され、「ねらい」(3)に「言葉に対する感覚を豊かにし、」が加えられた。「内容の取り扱い」で「(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」が新たな項目として使われ、言葉そのものに対する興味を促し、言葉の感覚を豊かにすることが求められている<sup>(16)</sup>。

(3) ねらい「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」について絵本は、子どもの言語発達を促すことが従来の研究から明らかにされてきた。

横山の研究は、領域「言葉」に関して、保育における絵本の役割について指摘してきた(横山2019)。保育における絵本の役割を、子どもと絵本との出会いの観点からまとめられ、絵本との出会いを「つくる」「広げる」「つなぐ」「深める」の4点を役割として説明した。家庭で絵本と接する機会の

少ない子どもにとって、絵本と出会う場を「つくる」。家庭では読むことの少ない多様な種類の絵本との出会いを「広げる」。絵本を介して子どもと保育者、子ども同士、家庭(保護者)と園、さらには子どもと遊び、子どもの生活と物語世界などを「つなぐ」。保育者の絵本の読み方によって、子どもの言葉の力の育ちが異なるなど、絵本との出会いによって子どもの育ちを促す「深める」である。出会いを通して、子どもは内容(9)「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」経験を深めていくことにもなる。また、絵本は、内容(7)「生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」経験にもなる。新幼稚園教育要領(2017)では、「言葉に対する感覚」を豊かにすることが強調され、「言葉の響きやリズム」に触れ、その楽しさを味わえるようにすることが新たに求められている(内容の取扱い(4))。子どもがいかに生活の中で「言葉の響きやリズム」に親しみ、「言葉に対する感覚」を豊かにする経験を深めているかを示し、絵本の役割の大きさが示される。

## 4. 発達と絵本の活用

絵本の読み聞かせには、発達に適した絵本を選び、発達に適合した読み聞かせが必要である。

### 4.1 発達3・4・5歳児とことば

<3歳児について>

長い文章や複雑な言葉を話すようになり、「ものを考える道具」として言葉を使い始める。さらに大人との会話や絵本に触れ合う経験の中で、獲得する言葉の数や興味はますます増えていく。

<4歳児について>

話すことに困らないだけの語彙数を得て、自分なりに思いを伝えるようになる。伝わらないもどかしさを感じるのもこの頃。言葉の力が土台となって想像力が育ち、目に見えない世界や虚構の世界への憧れが生まれる。

<5歳児について>

知っていることを再確認したり、想像したことを話す「つぶやき語」が出始める。これは「○○だけれど○○だ」という「言葉による自己調整機能」が一応の完成期を迎えたことの流れ。また、就学に向

けて興味の対象は文字へ。数字の理解も始まる。

## 4.2 絵本選びのポイント

<3歳児>

日常生活の物語と対応する言葉の他に、「イメージの世界を創る言葉」があることに気づき始める3歳児。物語の世界に出会うことで、言葉で考える力は大きく育まれていく。文にじっくりと耳を傾け、絵をよく見て、自分のイメージと重ねたり、ハラハラドキドキする気持ちを味わえるような物語絵本がおすすめ。

イメージする力が育ち、現実から離れた知らない世界や未体験のことへの興味・関心が膨らむ。ファンタジーや冒険もの、昔話など、さまざまな種類の絵本を読み、新しい世界と出会わせたい。

<4歳児>

言葉がいくつかの音の集まりだと知り始める4歳児は、しりとり遊びや逆さ言葉など、言葉と音との関係に興味をもち始める。言葉遊びが出てくる絵本を選んで、楽しみながら言葉のもつおもしろさや感覚を育てる。

目に見えない世界への憧れや探究心を満たす、ファンタジー絵本や昔話、冒険物語といったジャンルがおすすめ。また、虚構と現実の世界を行き来することの楽しみを知るようになると、ナンセンス絵本も楽しめる。現実から離れた物語世界を楽しみながら、イメージの世界はどんどん膨らんでいく。

<5歳児>

自分自身の気持ちや相手の気持ちに敏感になりだす時期。主人公の生き方に感動できるなど、子どもの内面に響くような絵本に出会わせたい。そうした絵本との出会いを通して、豊かな感情が子どもたちの中に生まれ始める。

言葉の発達に伴い、知的要求がアップ。これまで選んできたファンタジー絵本で思考力を柔軟にしながら、自然科学や平和、命など幅広いジャンルの絵本を読み、子どもの心を大きく育てていく。

文章量が多く、起承転結が複雑化した絵本や、絵が挿し絵程度の幼年童話にも興味をもつようになる。1日では読み切れない、続き読みが必要な本など、すぐに結論が出ない物語の魅力を楽しみ始める。

## 4.3 読み聞かせのポイント

<3歳児>

3歳児になると、少し長いストーリーのある絵本が楽しめるようになる。言葉の意味も考え始めるので、絵本の中の言葉に気付けるように、ゆっくり絵を見せて読む。

<4歳児>

目では見えないものが見え始め、虚構成果と現実世界との切り分けが始まり、ファンタジーやナンセンス絵本などを楽しめるようになる。言葉にも興味を持つため、しりとりや回文などの絵本に出会わせて言葉のおもしろさを伝え、言葉の感覚を育てたい。

言葉の理解が深くなり、自分なりのイメージを膨らませて絵本の世界に入れるようになったとはいえ、まだ、理解力には個人差が大きい時期。いっしょに見る子どもの数が多くなるので、見やすくする工夫も大切。

ストーリーのおもしろさがわかるようになると、その世界に入って遊びたくなる。遊んだあと、ストーリーのおもしろかったところを劇遊びで遊ぶ。

<5歳児>

知的要求が高まり、絵本や本をよく「見る」「聞く」「語る」ようになる。そして知らない世界、不思議な世界に誘ってくれる絵本や本からメッセージを受けとめ、自分の中に取り込んで考えるようになる。読んだあとの対話も大切に。

## 4.4 読み方

<3歳児>

表紙の絵本をゆっくりと見せながら、タイトルや作者名を読むと、絵本に対する期待の声が子どもたちから聞こえてくる。その声をしっかりと受けとめてから読むと、自然と絵本の世界に集中するようになる。

言葉の意味がわかり、考える力も育ち始めた3歳児は、自分なりにイメージを膨らませることができると、読み手の大げさな抑揚や声はかえってじゃまに。大人の手助けなしに、絵本の世界に出入りできるようになるこの時期は、静かな声で語りかけるように読むことが大切。

言葉の理解が十分ではないため、途中で言葉を挟んだり、指さしをしたりするなど、集中できなくな

ることがある。それでも軽くうなずく程度で最後まで読み通す。ただし、子どもの言葉や反応を取り上げることで、お話しの展開がよくわかるようになる場合などは、中断してみんなに気付かせてから読み進めることが必要。臨機応変に対応。

絵本の中の出来事と自分の体験とを重ねられるようになるため、共感したり、反発したりする気持ちを抱くようになる。気持ちを言葉にする楽しさも知る時期なので、読み終わったあとにたくさん聞くように。

#### < 4 歳児 >

読み聞かせでの集中力が高まる 4 歳児。絵の見せ方や、説明の仕方を工夫することで内容の理解をより深める。

言葉に対する感覚が敏感になるため、言葉の内容が絵のどこに描かれているのか、絵をじっくりみようとする。絵と文との関係を確認しながら読み進めることで、言葉で書かれていても絵で描かれていないところ、またその逆の場面などを読み取る力が育ち、その場面をイメージすることでより深い内容の理解へとつながっていく。

長めのお話を読むことが増えるため、知らない言葉や展開のわかりにくい場面などで、「○○ってどういうこと？」と聞かれることがある。初めて読む絵本や内容が難しめの絵本は、ところどころ説明を加えて理解を深める。

読み終わったら、感じたことを自由に話し合う時間をとる。友だち同士で感じたこと、わかったことなどを言葉で話すことで、絵本の楽しさがより一層心に残る。

即興的な劇遊びなど、ごっこ遊びを行うのも良い。4 歳児はヒーローやヒロインへの憧れが強くなる時期なので、主役に人気が集まることも。そんなときは、まず全員で主役になりきると、遊びを繰り返すうちに自然と役の分化などが始まる。4 歳児なりに劇作りの楽しさを味わうようになる。

#### < 5 歳児 >

内容がよく理解できている証である「つぶやき語」を、しっかりと聞きとりながら読む。先を急がず、共感の言葉を適度に返しながらかみ進めることで、他の子どもたちもストーリーの先の見通しが立ち、絵本の世界に没頭できる。

声音や大きさな表現は必要ない。下読みをきちんと

としたうえで読み聞かせれば、自然な抑揚と臨場感が出てくる。読み取る力が育ってきた 5 歳児には、読み手自身が作品世界に入り込み、静かにゆったりと自然体で読むのが一番。

読後は、感想を強要せずとも、子どもたちから感じたことや思ったことなどが自然とあふれ出てくる。その一言一言をしっかりと聞いて受けとめることが大切。そうすることで、絵と文から感じたメッセージを言葉で表現する力が育っていく。

内容を深く理解するために、即興的に劇遊びを積みかさねる方法もある。言葉だけでなく、体で表現するおもしろさ、難しさを知り、絵本のメッセージをもっと深く感じ取ることができる<sup>(17)</sup>。

## 5. 実習からの学び

3 法令が改定され、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園では 3 歳以上の幼児教育が共通のものとなり、子どもの保育実践がわかりやすく説明された。保育者養成校の学生は実習を通して、保育実践から様々なことを学び、大学で学びを深めてきた。短期大学の学生が教育実習を通して、子どもの感性と表現を学び、将来保育者として子どもの発達にふさわしい教育がなされる援助ができる必要がある。本稿では、教育実習を通して、実習中に学生が体験した学びから、今後必要な指導について検討したい。

2019 年 10 月中旬、教育実習を終えた短期大学部 1 年生の「自己表現・グループ表現」の授業に出席した 40 名に「絵本の読み聞かせを実習で行った感想と課題」と実際に読み聞かせを行った絵本について調査票を配布した。調査の趣旨を説明し、調査結果を使用する許可は調査票回収時に得た。調査票は 39 名より回収した<sup>(18)</sup>。

10 月中旬に行われた教育実習 I では、芋掘り遠足、運動会、ハロウィンに関する行事など秋に行われる行事が多く行われていた。また、お誕生日会、お店屋さんごっこ、マラソン大会練習、お遊戯会の劇練習、七五三の千歳飴袋製作、折り紙、ピアノ、クリスマスプレゼント用の袋づくりなども行われていた。

実習前に各学生は発達に合った絵本の選び方、読み聞かせ方法について学んだ後、お互いに読み聞か

せの練習を行い、各自の課題を理解して実習に臨んだ。実習中全ての学生が絵本や紙芝居の読み聞かせを行い、実習先で様々なご指導を頂いていた。実習園によっては、保育者だけではなく、保護者が読み聞かせを行ったり、ボランティアによる読み聞かせも行われていた。

学生が行った読み聞かせはクラス全体の場合と個々の子どもを対象にしたものに分かれていた。読み聞かせの導入、読み聞かせ中の対応、まとめの方法について実習前に学んでおきたかったという回答が最も多い結果であった。次いで、絵本の持ち方やページのめくり方が難しかったという回答が多かった。絵本の読み方は授業中説明し、読み聞かせの練習中も注意したもの、友人の前での練習と子どもの前で実際に行うのとでは状況異なるため、多くの学生には難しかったようである。

絵本の読み聞かせ後、子どもたちが絵本の感想を話してくれたり、本の内容について、本に出てきた言葉を言う子がいた。絵本を読んでいる最中に子どもたちが絵本のセリフや絵に反応している部分、一人ひとりが真剣な表情や笑顔で楽しんでくれたため、自分自身も楽しく絵本の読み聞かせを行うことができたなどの感想もあった。

学生に記述してもらった内容のうち、3つの力にあてはまると思われる内容、幼児期にふさわしい教育の根幹となる3つの力は、①「知識及び技能の基礎」②「思考力・判断力・表現力等の基礎」③「学びに向かう力、人間性等」を実習中理解できた学生は多くなかったようである。

また、幼稚園教育要領に関する内容や、子どもの発達に関する学びを深めてから実習に臨むべきだったという回答はなかった。

実習を通して、幼児期にふさわしい教育の根幹となる3つの力を部分的に学んだ様子うかがわれた。幼児期にふさわしい教育の根幹となる3つの力①「知識及び技能の基礎」②「思考力・判断力・表現力等の基礎」③「学びに向かう力、人間性等」は、実際の保育場面では多くのことがなされている、気付かなかったり、見落としている部分は多いと思われる。また、これら3つの力がどのような時に教育されているのか、注意して観察するように指示していればさらに深く学ぶことができているかもしれない。

## 6. まとめ

領域「言葉」で言葉の獲得に関する指導の観点が示され、「ねらい」(3)に「言葉に対する感覚を豊かにし」が加えられ、「内容の取扱い」で追加された項目には(4)「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」がある。言葉そのものに対する興味を促し、言葉の感覚を豊かにすることが求められるようになった<sup>(19)</sup>。領域「言葉」では「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」ことが目指され、内容では「(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」ことが示される。

「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「認定こども園教育・保育要領」に書かれていることは、各園の教育・保育の質の改善の方向性である。3法令が強調していることは、幼稚園教諭・保育士が養護性をもって、子どもの体の面と心の面の支えをしっかり行うことであり、3歳以上の子どもには「集中して遊ぶ」<sup>(20)</sup> 時間をつくることと、認定こども園教育・保育要領のことばとして記されている。遊びが充実すると活動から次の活動へと展開し、遊びが広がり、その中で子どもが育っていく。その過程を保育者が援助していくような「幼児教育」をどの施設も行っていこうと提言されている。

小学校の学習指導要領では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を引き継ぐ形でスタートカリキュラムが義務づけられた。小学校入学後の2ヶ月くらいは幼稚園・保育所のやり方を取り入れながら徐々に小学校のやり方につなぐ接続になっている<sup>(21)</sup>。

実習中の表現活動における体験を通して、幼児期にふさわしい教育の根幹となる3つの力①「知識及び技能の基礎」②「思考力・判断力・表現力等の基礎」③「学びに向かう力、人間性等」を部分的に学生は学んでいた。今後は将来、保育者として子どもの発達にふさわしい教育がなされる援助ができるように、「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」をさらに読

み深め、授業でも3つの力がどのような時に教育されるのかを注意深く観察できるように指導していくことと、学生が長期的な展望を持った保育者として質の高い保育が行えるように指導していく必要がある。

実習生が直接体験できる活動は多くの場合は絵本の読み聞かせである。実習中の絵本の読み聞かせに向けて、幼児が「絵本の読み聞かせを通して、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるよう」な絵本の読み聞かせ方法を確立できるよう、実習前に準備できるように指導していく必要がある。

### <注>

- (1) [https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/YOJI\\_seikatsu2018\\_28P\\_5th\\_web\\_all.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/YOJI_seikatsu2018_28P_5th_web_all.pdf)
- (2) 無藤隆「国際調査からみえる日本の母親の特徴」[https://berd.benesse.jp/up\\_images/textarea/research/YOJI\\_seikatsu2018/06\\_YOJI\\_seikatsu2018\\_web.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/textarea/research/YOJI_seikatsu2018/06_YOJI_seikatsu2018_web.pdf)
- (3) 荒牧美佐子 2019「親子間での読書体験の共有が将来につながる言葉の力を育む」『データから見る幼児教育 読み聞かせの実態と言葉の発達—幼児期から小学生の家庭教育調査—』[https://berd.benesse.jp/up\\_images/magazine/KORE\\_2019\\_spring\\_data.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/KORE_2019_spring_data.pdf)
- (4) 「第1回【識者インタビュー】なぜ、今、「保幼小接続」に注目するのか？ —「保幼小接続」に注目する背景と今後の方向性」<https://berd.benesse.jp/berd/focus/2-youshou/activity1/>
- (5) 種村晴美 2018「領域『言葉』における言葉の感覚が養われる教育方法についての一考察」中部学院大学・中部学院短期大学部教育実践研究3(2)、21頁。
- (6) 無藤隆 2017『3法令改定の要点とこれからの保育』チャイルド社、3頁。
- (7) 無藤隆 2017『3法令改定の要点とこれからの保育』チャイルド社、22頁。
- (8) 無藤隆 2017『3法令改定の要点とこれからの保育』チャイルド社、22-23頁。
- (9) 無藤隆 2018「幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における幼児教育の捉え方とは」『事例で学ぶ保育内容領域表現』萌文社、12頁。
- (10) 無藤隆 2018「幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における幼児教育の捉え方とは」『事例で学ぶ保育内容領域表現』萌文社、13頁。
- (11) 無藤隆 2018「幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における幼児教育の捉え方とは」『事例で学ぶ保育内容領域表現』萌文社、13頁。
- (12) 無藤隆 2018「幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における幼児教育の捉え方とは」『事例で学ぶ保育内容領域表現』萌文社、15頁。
- (13) 無藤隆・汐見稔幸 2017『イラストで読む！幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園 教育・保育要領 はやわかりBOOK』学陽書房、37頁。
- (14) 無藤隆 2017『3法令改定の要点とこれからの保育』チャイルド社、37-43頁
- (15) 開仁志は「保育内容5領域と育みたい資質・能力の関係についての考察」において3法令の保育に関する「ねらいおよび内容」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」小学校各教科との関係を分析・考察し図式化している。開仁志 2018「保育内容5領域と育みたい資質・能力の関係についての考察」『金沢星稜大学 人間科学研究』第11巻第2号、59-64頁。
- (16) 無藤隆・汐見稔幸 2017、『イラストで読む！幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園 教育・保育要領 はやわかりBOOK』学陽書房、39頁。
- (17) 徳永満理 2015『よくわかる0～5歳児の絵本の読み聞かせ』チャイルド社 46-67頁。
- (18) 本来50名の授業であるが、調査当日は3名は欠席であった。
- (19) 無藤隆・汐見稔幸 2017『イラストで読む！幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園 教育・保育要領 はやわかりBOOK』学陽書房、38-39頁。
- (20) 第3 幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項<3 環境を通して行う教育及



び保育の活動の充実を図るため、幼保連携型認定こども園における教育及び保育の環境の構成に当たっては、乳幼児期の特性及び保護者や地域の実態を踏まえ、次の事項に留意すること。

- (21) 無藤隆 2017『3法令改定の要点とこれからの保育』チャイルド社、53-55頁。3法令同時改訂により、幼児教育が幼稚園、保育所、認定こども園で共通のものになり、それが小学校・中学・高校と縦のつながりにもなっている。0歳から18歳までの教育体系が作られたという。

———2018「幼児期の「言葉の教育」を考える：幼小接続と児童文化財の観点から」『聖和短期大学紀要』(4), 1-9, 2018

棚橋尚子, 宮下俊也, 横山真貴子 2018「教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成(4)「言葉」に関わる教育内容研究知見に依拠して」次世代教員養成センター研究紀要(4), 255-258

### <引用・参考文献>

- 秋田喜代美 2009「Ⅱ 幼稚教育要領の改訂のポイント領域・言葉」『新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて』別冊発達29 ミネルヴァ書房
- 會森恵美 2019「熟練保育士における領域「言葉」に関する意識調査」東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要(54), 79-89,
- ベネッセ教育総合研究所「幼児期の家庭教育国際調査【2018年】」  
<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail.php?id=5257>
- 伊崎一夫 2018「乳幼児期の言語発達と思考力の育成(1) 幼児教育の連続と発展」『奈良学園大学紀要』第8集, 1-12,
- 橋村晴美 2018「領域「言葉」における言葉の感覚が養われる教育方法についての一考察-学生の絵本の選書から見えてきたもの-」中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究3(2), 19-28,
- 森川拓也 2018「領域「言葉」から「小学校国語科」への展開についての考察：幼保小接続の観点から」桜花学園大学保育学部研究紀要(17), 175-191,
- 南陽慶子 2017「保育内容「言葉」に関する研究の動向と特質」こども教育宝仙大学紀要(9), 13-23,
- 大北理津子, 小見のぞみ 2017「新「幼稚園教育要領」等における領域「言葉」の保育への展開」『聖和短期大学紀要』(3), 11-20,

